

見出され、見出して

奨励	竹内 富久恵〔たけうち・ふくえ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団神戸愛生伝道所・北須磨教会牧師

その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、「わたしに従いなさい」と言われた。フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった。フィリポはナタナエルに出会って言った。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」するとナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい」と言った。イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と言われた。

（ヨハネによる福音書 1章43—48節）

いのちそのものの
ちからを

ここに持ってきているのは、フェリシモという通販会社が販売しているパンの缶詰です。これを購入するきっかけになった6月の新聞記事をここに持ってきているので、紹介させていただきます。

「アンパンマン」で知られる漫画家のやなせたかしさん（93）が、通販大手「フェリシモ」（本社・神戸市）が発売した非常食「缶詰パン」の缶にイラストを描いた。ゾウやチューリップ、イチゴに太陽一。カラフルな絵は、50年前にやなせさんが作詞した「手のひらを太陽に」をイメージしたという。非常時に被災者を救う缶詰パンに、やなせさんの「生きる」ことへのメッセージが込められている。

「この詞はね、僕がすごく落ち込んでいた時に作ったんですよ。まさか自分の代表作になるとは思わなかったな」。半世紀前に書いた「手のひらを太陽に」について、やなせさんはこう振り返る。当時、やなせさんには漫画の仕事があまりなかった。することがなく、手のひらを見ていると、幼いころに郷里の高知で遊んだ「レントゲンごっこ」を思い出した。懐中電灯を体当てる遊びだ。当時は停電が日常茶飯事。停電に備えて、やなせさんは家の中のあちこちに懐中電灯を置いていた。冬の真夜中、近くにあった懐中電灯をつけ、手のひらの下から当ててみた。「するとね、血の色がものすごく赤くて、真っ赤で。自分はすごく落ち込んでいたのに、血は元気だなあと」〈手のひらを太陽に すかしてみれば まっかに流れる ぼくの血潮〉有名な歌詞は、この体験から生まれた。（中略）缶詰のイラストのテーマに「手のひらを太陽に」を選んだのは「僕らはみんな生きている。花も草もみんな命があるんだから、何が入ってもいい」と思ったため。（中略）やなせさんは最後に「生きる」ことについてこう語っていた。「精子と卵子が出会う確率は何億分の1で、命は一つの奇跡。だから命はね、われわれが生きてる地球のために使わないと。核兵器とか殺し合いとか、人間は非常にばかしてるんですね」缶詰パンは、1ヵ月1650円で2個ずつ届き、15ヵ月で全種類の味がそろそろ。金額の一部は基金に積み立てられ、被災地の子どもたちの心のケアなどに使われる。（2012年6月10日付朝刊 毎日新聞）

このフェリシモという会社のホームページには「阪神淡路大震災のとき『非常食のパンは美味しくない』という声に動かされたパン屋さんが、試行錯誤の末、特殊製法による、ふっくらしっとりおいしい缶詰パンの開発に成功。災害時や途上国の食糧支援にも『おいしい非常食』として活躍しています」と書かれていたのですが、そこにおられる方に缶詰を開けていただきましょうか。ちょっと食べてみてください。どうでしょう。阪神淡路大震災のときに食べた非常食のパンは美味しなかったと神戸ではよく聞きましたが、この缶詰には、すごく甘い匂いのふわふわのパンが入っています。非常時においてはその一瞬だけなのだろうけれども、このパンが出てきて、甘い匂いを嗅ぎ、ふわっとした美味しいパンを口に入れることができた、そのひとときだけでも少しは息をつけるのかもしれない、そんなことを想像してみたことでした。ちなみにこのパンの缶詰には、小さく、こんな言葉が書かれています。「Give us this day our daily bread」・・・そうです、「我らの日用の糧を今日も与え給え」です。小さな文字ですが、このパンが「私の」ではなく「我らの」であることの意味も強く意識させられます。

それにしても、あの「手のひらを太陽に」の歌詞に、作者であるやなせさんのこんな状況や思いがあったとは、私は全く知りませんでした。「自分はすごく落ち込んでいたのに、血は元気だなあ」というやなせさんの言葉を読んで、私は星野富弘（詩人・画家）という人の「私がどんなに絶望しようが、どんなに生きたくないと思おうが、いのちというものが一生懸命生きようとしている」という言葉を思い出していたのですが、それをやなせたかしさん流に表現すると、「手のひらを太陽にすかしてみれば まっかに流れるぼくの血潮」ということだったのか、と。実は、この歌の受け止め方が少し変わったのが、この新聞記事だったのです。そして同時に、この歌が伝えようとしているいのちそのものに備えられているちからのこと、そしてやなせさんの言葉をお借りするならば「命は一つの奇跡」である、ということについて、私はどれだけちゃんと知りながら思いながら生きているのだろうか、と問いかけられている思いがいたしました。

最後に大事なの

もう一つ、紹介させてください。これは昨年2011年4月17日付朝刊の「宝物は何ですか」という見出しの『毎日新聞』の記事です。

「すべてを失った」。被災地で何度も何度も耳にした。だが、今だからこそ思える自分だけの「宝物」。ランドセル、腕時計、焼け残った封筒……。さまざまなものをいとおしそに手にする被災者が、カメラの前に立ってくれた。

このような文章と共に写真が掲載されています。先生が見つけてくれたランドセル、死んだ息子の腕で動いていた腕時計、家族、あるいは妻の思い出・・・どの人の「宝物」も、モノそのものではなく、誰かの存在や誰かとの関係、つながりを強く感じさせるものばかりです。そしてこの記事は、最後にこう締めくくられています。

ある人は寂しげに、ある人は笑顔でカメラを見つめる。そのまなざしが私たちに問いかけてくるようだ。「あなたの『宝物』はなんですか」と。

私は、最後の最後に大事なものを、それはやはりモノそのものではなく、誰かの存在や誰かとの関係やつながりだということに行き着くなあと、この記事を読みながら考えていました。でもその割に、本当にいつもその大事なものを大事にしているのだろうか、ということもまた、問いかけられてくる思いがいたしました。

この二つの新聞記事から受けたこと―誰かの存在や誰かとの関係やつながりを大事にしているのか、という問いと、いのちそのものに備えられているちからのこと、またそのいのちが奇跡であること―は、根源的に同じ質のものを共有していると思います。ただ、これは決して、全く新しい問いというわけではなく、自分の日常を振り返るとき、そのなかで何度も新しく問い返され続けてきた、あるいは続けている、そういう類のものだと実感しています。そしてその多くは「やってしまった」という場面で起こったことなのですが、これは12年ほど前、私が今おります神戸愛生伝道所に赴任してほどなくの出来事でした。

不遜さを問われて

私は神戸愛生伝道所と北須磨教会という二つの教会を兼務しているのですが、本務教会である神戸愛生伝道所というのは、神戸愛生園という「障がい」者の人たちが生活しておられる施設の中で礼拝している教会で、礼拝出席者のほとんどは施設を利用しておられる障がい者の人たちです。まだ「はじめまして」から半月ほどしか経っていなかったときのこと、園の廊下を歩いていたら、ある方に呼び止められました。その方は筋肉の緊張が強く、体中に常に力が入っている、そういう状態の方なのですが、ちょっと皆さん、手を伸ばしてぎゅっとこぶしを握りしめてみてください。体が熱くなってちょっと疲れた感じがあると思いますが、その方はこれに似た状態がずっと続いているわけです。そして筋肉の緊張は口の周りにもありますから、お話をしていると、口の中に手を入れて発声した時のような音声で私には聞こえるんですね。そのとき、呼び止められて、私に仰られたことが、どのように私に聞こえたのか、ご本人の承諾をいただいていますので、真似をしてみたいと思います。「車椅子の〇〇〇の△△△取ってください」。どう聞きとられましたか。実は「車椅子の後ろの手紙取ってください」だったのですが、なんと私は「毛ガニ」と聞き取ってしまったのです。「ちがう！てがみ！」「毛ガニ？」とどのくらい繰り返したでしょう、おそらく20分近く経っていたと思います。当然、筋緊張の高いな一生懸命話してくださっているので、彼女は汗を流しながら「ちがう！てがみ！」と何度も何度も繰り返されました。私もその様子を目の前にしながら焦ってきて、そしてやっと、ちょっと待て私、車椅子の後ろのポケットに毛ガニが入っている可能性は無しではないけれども低い。じゃあ毛ガニに似た音の言葉で入っているようなものは何だ、何だ、とそこで気づき、「手紙ですか、鏡ですか」と尋ね、手紙だと理解するに至ったのでした。その夜、「私がいっと早く毛ガニに似た音の言葉で入っているようなものは何だろうか、と想像すれば、あんなに汗だくになって話してもらうようなことにはならなかった、体も心も相当疲れさせたはず」とその日のことを振り返り、翌日、謝りたくて彼女の部屋をお訪ねしました。ところが、「昨日は、しんどくさせて本当にすみませんでした」と私が謝ると、彼女はなんと「ううん、ちゃんとしゃべれなくてごめんね」と仰ったのです。やってしもた、と思いました。自分が自分そのものであることを謝らせてしまった、そう言わせるようなことを私はした、やってしもた、と悔やみに悔やんだことは何年経っても忘れることができません。「自分には毛ガニと聞こえる」という私の世界から出ようとしなかったこと、私とは違う彼女の世界と自分をつなぎ結ぼうとしなかったこと、それは、いのちのもつちからやいのちそのものに対して、はなはだしく不遜なことだったと思います。そしてその不遜さによって、私は彼女の存在そのものを彼女自身に「ごめん」と謝らせてしまったのだ、と。

見出され、見出すと
いう相互の関係

さて、今日読んだ聖書の物語は、イエスとフィリポという人がはじめて出会うという場面です。イエスがフィリポに出会って私に従いなさいと言われたら、それを受けてどうやらフィリポがついてしまったらしい様子が伺えます。なぜついていったのか、それを知る手がかりが、「フィリポに出会って」と訳されているところの言葉にあるようでして、ここで「出会って」と訳されているのは「見つけて」という意味です。イエスはフィリポを見つけ、フィリポの側から言えばイエスに「見つけられて」、ついていったということですから、フィリポにとって見つけられたこと、見出されたことがものすごいことだったのでしょう、そのイエスのことをナタナエルという別の人に伝えようとします。しかし、ナタナエルは「その人の何がすごいのか」と怪しむものですから、フィリポが「来て、見なさい」と応答しました。そしてナタナエルがイエスの方に近づいて行くのですが、なんと、自分の方からイエスに近づいてみたつもりだったのに、このナタナエルもまた、フィリポと同じようにすでに見つけられていた、と話は展開していきます。このフィリポとナタナエルという二人の人とイエスが出会う場面には、知る主体、見出す主体であるイエスが、君たち、近づいてこい、と自分の方へ来させるのではなく、その逆方向、イエス自身が自分という存在を他者の方へと向かわせている、寄せていることが感じられるように思います。さらにもう一つ興味深いのは、フィリポが、自分を見つけてくれたイエスのことをナタナエルに伝えようとしたときのことが、45節には「フィリポはナタナエルに出会って言った」と表現されていることです。先ほども言いましたように「出会って」とは「見つけて」という意味です。とすると、ナタナエルに「こちらに来て、見なさい」と言う前に、すでにフィリポの方がナタナエルを見つけていたということになります。自分の側に、こちらの方に来させようとするのではなく、自分の存在をナタナエルの方に寄せていく、そういう様子が浮かんできます。つまり、自分がイエスにされたのと同じようにして、ナタナエルとの関係を生きはじめようとする、そんなフィリポの姿がここにはあるのではないのでしょうか。そしてそのフィリポの姿は、見出された存在として生かされているがゆえに、他者との関係のなかで、自分が見出す者として、自分の存在を他者に寄せていく者として、その関係を生きはじめていくようにされている、そういう「人」のありようを伝えてくれているのではないのでしょうか。

振り返れば、フィリポやナタナエルのように、自分も見出された存在として生かされていることを知るなかで、「どんなに絶望しようが、どんなに生きたくないと思うが、一生懸命生きようとしているいのちが私に与えられている」こと、「手のひらを太陽にすかすと まっかに血潮を流すこの生きている命そのもののちからが私に備えられている」ことをも知らされてきたように思います。そして、見出された存在として生かされているがゆえに、他者との関係のなかで見出す者、自分の存在を他者に寄せていく者としてその関係を生きはじめていくようにされていることも、実はいつも知らされてきたのだと思います。それでも、残念ながら、「やってしもた」ということを繰り返さない自信はありません。ただ、いつも新しい問いかけを与えられ続けていく、それもまた見出してくださる神の働きかけのなかにあることなのだ、と思います。その働きかけのなかで、見出され、見出すという相互の関係が豊かにされ、宝物に出会うことができるようにされていることを、感動をもって味わっていったら、そう願うものです。

2012年11月6日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録